

コミュニケーション手段の獲得により「色々な人と交流する」という作業と結びつくことができた事例

大塚美幸, 仲村知洋, 吉川ひろみ

Enabling Occupational Engagement in Interpersonal Exchanges Through the Acquisition of Communication Tools: A Case Study

【はじめに】今回、色々な人と交流したいという希望があるが言葉での意思表示が困難である20代女性のクライアントを担当する機会を得た。訪問作業療法を行った結果、コミュニケーション手段の獲得により友人やスタッフと会話ができ、クライアントと「色々な人と交流する」という作業が結びつくことができたため報告する。なお、クライアント、家族には個人情報保護して事例報告を行うことを説明し、同意を得た。

【事例紹介】Aさん、20代、女性。管理栄養士になるため専門学校に通っていたが平成18年、19歳の頃、劇症肝炎のため昏睡状態となり、母親からの肝移植中、脳出血を発症し四肢麻痺となった。平成19年に自宅へ退院し、両親、兄夫婦とその子供、兄の8人暮らし。右手指、頸部が少し動かせるのみで、テレビを見ながら終日ベッドに臥床しており日常生活動作は全介助、楽しみはお菓子を食することである。発話はできず、右手指の動きでyesの意味を示したり、表情の変化で喜怒哀楽を表わしている。行いたい作業は「携帯電話でメールを送ること」で色々な人と交流したいと思っている。Aさんが人と交流する機会は、友人の年に数回の訪問、週1回のデイサービスであった。

【介入と経過】平成23年から訪問作業療法が週1回、60分間で開始となった。携帯電話でメールを打つ評価を行うと、右手指の随意性低下により操作は困難であった。Aさん、母親に意思伝達装置を使用できれば人と会話やメールをして交流が可能となることを説明すると賛同し、目標を「友人やスタッフに意思伝達装置で自分の気持ちを伝えることができる」に一緒に決めた。母親からの情報で入院中にレッツチャットという意思伝達装置を使っていたことがわかり、使用されず自宅に置いてあった。レッツチャットと数種類のスイッチを試すと30分間でAさんの名前3文字を打てた。練習していくと30分間で14文字打て、単語レベルで会話が可能となった。4ヶ月後には訪問以外の時間に1人で練習するようになった。6ヶ月後にはデイサービスにレッツチャットを持参し、スタッフと好きな芸能人やテレビの話をできるようになった。友人の訪問時にも会話できた。Aさんは「自分の伝えたいことが伝えられるようになってよかった」と述べた。また、Aさんの希望により改造したマウスに変更して練習すると30分間で36文字打てるようになった。その頃、Aさんは1人で家族へのバースデーメッセージを打つことがあった。メッセージをカードにして家族に贈ることを提案し、一緒にプレゼントした。その後、Aさんはカードを贈りたい人を指名するようになり、家族、スタッフなど計19枚のカードを贈った。Aさんはカードを贈ることは「感謝や祝福を伝える手段で自分の役割のようなもの」と述べた。現在はメー

ル機能の付いた意思伝達装置「伝の心」の給付を申請中である。

【考察】Aさんは退院後の約4年間、色々な人と交流したいという作業ニーズがありながら言葉での意思表示ができず作業剥奪の状態であった。しかし、Aさんの使用できるスイッチを「適応」し、マウスを使いやすいように改造する「デザイン・実行」を行い、文字を打ち込む方法を「コーチ」といった可能化の技能が使用されたことでコミュニケーション手段が確立し、Aさんと「色々な人と交流する」という作業が結びつくことができたと考えられる。本研究から、訪問作業療法を行うことで作業療法士が在宅におけるクライアントの作業ニーズを発掘し、クライアントと作業が結びつくための橋渡し役を担えると考えられ、今後、積極的に訪問領域に介入していくことが必要と思われる。



アール・ケア

コミュニケーション手段の獲得により「色々な人と交流する」という作業と結びつくことができた事例

Enabling Occupational Engagement in Interpersonal Exchanges Through the Acquisition of Communication Tools: A Case Study

大塚美幸¹⁾, 仲村知洋¹⁾, 津川英之¹⁾, 吉川ひろみ²⁾, 石原洋³⁾

¹⁾株式会社アール・ケア訪問看護ステーションキャスト,

²⁾県立広島大学保健福祉学部作業療法学科, ³⁾橋本義肢製作株式会社

はじめに

今回、色々な人と交流したいという希望があるが言葉での意思表示が困難である20代女性のクライアントを担当する機会を得た。訪問作業療法を行った結果、コミュニケーション手段の獲得により友人やスタッフと会話ができ、「色々な人と交流する」という作業が結びつくことができたため報告する。



事例Aさん

- Aさん, 20代, 女性.
- 管理栄養士の専門学校に通っていたが平成18年, 19歳の頃, 脳出血を発症し四肢麻痺となった.
- 平成19年に自宅へ退院し, 両親, 兄夫婦とその子供, 兄の8人暮らし.
- 右手指, 頸部が少し動かせるのみで, テレビを見ながら終日ベッドに臥床. 日常生活動作は全介助. 楽しみはお菓子を食えること. 発話ができず, 右手指の動きでyesの意思を示したり, 表情の変化で喜怒哀楽を表わしている.
- 利用サービスはデイサービス(週1回), 訪問看護(Ns, PT各週1回), ヘルパー(週3回).
- **行いたい作業は「携帯電話でメールを送ること」で色々な人と交流したい.**

介入と経過

平成23年4月から訪問作業療法が週1回, 60分間で開始.

携帯電話でメールを打つ評価を行うと, 右手指の随意性低下により操作は困難.

Aさん, 母親に意思伝達装置を使用できれば人と会話やメールをして交流が可能となることを説明すると賛同し, 目標を「友人やスタッフに意思伝達装置で自分の気持ちを伝えることができる」に一緒に決めた. 入院中に「レッツチャット」(図1)という意思伝達装置を使っていたが現在は使用していなかった.

右母指だけで使える色々なスイッチ(図2)を試し, レッツチャットの練習開始. PPSスイッチで名前3文字が打てる. その後, プッシュ式スイッチに変更し練習を重ねると30分間で14文字打て, 単語レベルで会話が可能となった.

平成23年10月 デイサービスにレッツチャットを持参し, スタッフや他利用者と好きな芸能人やテレビの話ができるようになった. 友人の訪問時にも会話ができる. Aさんは「自分の伝えたいことが伝えられるようになってよかった」と述べた.

平成24年10月 レッツチャットに接続できるようマウスを改造し, 右示指で打つ練習をすると30分間で36文字打てるようになった. その頃, Aさんは1人で家族への誕生日メッセージを打つことがあった. メッセージをカードにして家族に贈ることを提案し, 一緒にプレゼントした. カード(図3)を渡す時, Aさんは号泣し, カードを受け取った母親も眼に涙を浮かべていた.

その後, Aさんはカードを贈りたい人を指名し, 家族, スタッフなど計19枚のカードを贈った. Aさんはカードを贈ることは「感謝や祝福を伝える手段で自分の役割のようなもの」と述べた.

平成26年12月 業者の協力によりメール機能の付いた意思伝達装置「伝の心」(図4)の使用開始. 色々な人とのメールを楽しみ, 調子の良い日は1人でメールを送れるようになった. また, HPを見て興味のあることを検索したり, 好きな芸能人の写真を印刷し, 部屋に飾ったりした. がんばっている姿が取り上げられTVにも出演した.



図1. レッツチャット



図2. 使用したスイッチ類
(左:プッシュ式スイッチ, 右:PPSスイッチ)



図3. メッセージカード



図4. 伝の心

考察

- Aさんは退院後の約4年間, 作業剥奪の状態であった. しかし, 使用できるスイッチを「**適応**」し, マウスをレッツチャットに接続できるように「**デザイン・実行**」を行い, 文字を打ち込む方法を「**コーチ**」し, Aさん, 業者と「**相談**」, 「**協働**」しながら伝の心を導入するなど**可能化の技能**(Townsend.E.A.et al,2007)を使用したことで, Aさんと「色々な人と交流する」という作業が結びつくことができたと考えられる.
- Aさんはレッツチャットにより会話が可能となり, そこから作業が発展したり, 思いもよらぬ新たな作業が出てきたりと「**作業の広がり**」が見られることが示唆された.
- 本研究から, 訪問作業療法で作業療法士が在宅におけるクライアントの作業ニーズを発掘し, クライアントと作業が結びつくための橋渡し役を担えられ, 積極的に訪問領域に介入していくことが必要と思われる.